
魔法少女リリカルなのはStrikerS 古の騎士

八咫鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 古の騎士

【Nコード】

N42640

【作者名】

八咫鴉

【あらすじ】

宿題も終わり「明日は土曜、徹夜でゲームだ!」と意気込んだ主人公が始めたのは白騎士物語
眠くなってきたのでゲームを止め寝て目が覚めるとそこは!

プロローグ（前書き）

一つ目の作品も終わらぬうちに2作目…

書く速度は遅くなります。
ご了承ください。

ブローグ

side ?

んゝ暑い、暑い、熱っ！

目が覚めると回りは火の海だった。

こ、ここはどこ？！

俺は自室で寝たはずなんだがなぜ？何故？way？
オンドウルラギッタンディスカー？！

突然のことで少々壊れる主人公

よしよし、名前は防人^{もりさき}零^{れい} 15才 黒髪のセミロング 目の
色は深紅

うんうん、服装は、上から黒のパーカーの中に黒のシャツ、カ
ーゴパンツに黒の安全靴

問題ない、持ち物は、ウエストポーチの中に手紙と文庫本と何
だこれ、紋章が入った腕輪が4つ

左目見えないけど何故だろ？それにしてもどっかで見た紋章だ
なゝ、なにになに？

『おめでとうございます！貴方は抽選により別の世界に行つて
もらいます！

拒否権はありません！というかこれを読んでいる時点で実行
されています！

貴方が今居る世界はリリカルなのはの世界です。
改変するもよし、関わらないで暮らすもよし

そこは自由です。（面白い方向に進むといいな）

で、ただの一般人に何も持たせないで行かせるのは酷だな
って思ったので

貴方が寝る前にやってたゲームの力を注ぎ込んでみました。

□

何だと？リリカルな上に寝る前にやってたゲーム……白騎士物語か？

んー全部クリアしてないから細かくは分からないなまあなんとかなるだろ。

続き続き

『力の使い方がわからないのでは宝の持ち腐れなので、
詳しい説明と使える武装などなどは本のほうに書いてあるの
で読んでください。』

アイテムなども本から出せますよ、そりやもう無限に。
では、がんばってくださいね♪

P・S・早く脱出しないと死んじゃうぞ♪

□

ふむふむ、文庫本じゃなかったんだな、よく見ると表紙に騎士
の紋章が描かれてる。

って落着いてる場合じゃなかった、腕輪を左右に二つ着けて、
耐火耐火と

体の周りに魔力をまとう

「フレイムバリア！」

魔法名を宣言すると体が少し赤く発光していた。

おお、熱くない。

さてと、今は何年なんだろうか…

…よ……あつ……や……よ……

ん？今声が聞こえたような？こっちか？

……こ……のや……よ……誰か……けて…

お？あんな所に人が声をっ

少女の背後にあつた天使の石像が崩れだした。

やばい！「クロックアップ」

自然と紡がれる自己加速の魔法と走り出すと同時に出現したガントレットと短剣

「古の剣を携えし 白き勇者ウィゼルよ 我に力を」

ガントレットに短剣を挿し込む

「変身！」

光が溢れ姿を隠す

『間に合え！』

光の中から白い鎧の騎士が現れ少女の上に被さると同時に崩れた。

全然痛くない、流石騎士だな〜とそうだ少女少女

『間に合ったか』

「え？」

うん、あちこち怪我はあるけど大丈夫だな。よっと

背中に残っていた残骸を除けて少女を手のひらに乗せて立ち上がる。

『もう大丈夫だ。』

「えつくつ」

「大丈夫ですか！」

少女から目を離し後ろを見ると白い魔導師が佇んでいた。

『この子を頼む。』

一目見て白い魔導師が誰だか分かった。

少女を魔導師に預ける。

「貴方は？」

エースオブエース高町なのはだと。

『大丈夫だ、問題ない。』

「詳しい話が聞きたいのでこれが済んだら私のところに来てください。」

OHANASIなのか?!いきなりOHANASIなのか?!

『了承した。』

断つても無駄なのがわかってるからOKするしかない……はあゝ

「安全なところまで一直線だから」

なのははRHを天井に向け

「一撃で地上まで抜くよ。」

『ロードカートリッジ』

「デイバイン・バスター!」

デイバイン・バスターで天井を打ち抜いた。

馬鹿げた威力だなゝ

「さ、行こう」

「は、はい、でも…」

ん?少女が俺のほうを見ている、もしかして…

『俺の名は白騎士』

「白…騎士」

『またな』

「うん。」

なのはに抱えられて少女は脱出していく。

さて、大体状況が読めたな、まずは変身解除してっと。

s i d e e n d

s i d e スバル

姉のギンガと父の職場に遊びに行くために空港に着いたが火災に巻き込まれ

ギンガと離れ離れになってしまったスバル。

歩いていると天使の像の前まで来て転んだ。

「痛いよ熱いよこんなのやだよ…帰りたいよ…」

ビシッ

天使の像の土台にひびが入った。

「助けて…誰か助けて…。」

バキッ

土台が割れスバル目掛け倒れてくる。

「ひっ」

誰か助けて！

『間に合ったか』

「え？」

声が聞こえた方向を見ると大きな騎士が像から守るように覆いかぶさっていた。

背中に残っていた残骸を除けて私を手のひらに乗せて騎士は立ち上がる。

『もう大丈夫だ。』

優しい言葉に涙が溢れてくる

「えっくっ」

「大丈夫ですか！」

声がするほうを見ると白い悪魔がいた。

『…この子を頼む。』

魔術師を見つけると騎士は私を魔術師に預ける。

「貴方は？」

『大丈夫だ、問題ない。』

「詳しい話が聞きたいのでこれが済んだら私のところに来てください。」

『了承した。』

「安全なところまで一直線だから」

魔術師さんは私に微笑むとデバイスを天井に向け

「一撃で地上まで抜くよ。」

『ロードカートリッジ』

「デイバイン・バスター！」

デイバイン・バスターで天井を打ち抜いた。

す、すごい…

「さ、行こう」

「は、はい、でも…」

魔術師さんが手を出してくれたけど騎士の名前が知りたかった。

『俺の名は白騎士』

「白…騎士」

私が聞く前に教えてくれた、白騎士か…

『またな』

「うん。」

私は魔術師さんに抱えられて少女は脱出する。

魔術師さんの名前は高町なのはさん。

エースオブエースと呼ばれる有名な人だ。

私は、守りたいものを守るようになりたいと思った。

side end

side 零

高町たちから離れて道無き道をタイダルウェイブで消火しながら移動中

確かこの辺りだった気がする。ああいたいた。ってまずい！

ギンガの足元に亀裂が入り砕ける。

「きゃあああああ！」

漆黒の剣を出現させ飛び降りる。

「古の闇を支配する 漆黒の翼ディニヴァスよ 我に力を」

落下中に剣を展開させる。

「変身」

剣から光が溢れ姿を隠す。

光から現れるは漆黒の騎士、特徴的な兜と漆黒の翼

『行くぞ』

大きく羽ばたき落下していくギンガを両手で受け止める。

『もう大丈夫』

「え？は、はい。」

助けたのはいいがどこから出るかね

「管理局です、大丈夫ですか」

あ、金色の死神だ

『大丈夫だ、問題ない。』

「あ、はい大丈夫です。」

さて、脱出しないといけないが道が分からない。

『道案内頼めるか？』

「はい、「あ、あの！」なに？」

「エントランスホールの方で妹とはぐれてしまって、名前はスバル・ナカジマ 11才です。」

『エントランスホール：ショートヘアで青い髪の子か？』

「その子がスバルです！」

『安心しろ、天井をぶち抜いた白い魔術師に預けてきたから問題ないだろう。』

「よかった」

スバルの安全を聞き安堵するギンガ

『あの子の姉か、名前は？』

「ギンガ・ナカジマ 陸士候補生13才です。」

「候補生か、未来の同僚だ。」

「きよ、恐縮です。」

ふと、視線を感じ下を向いてみるとギンガがじっとこちらを見ていた。

『どうかしたか？』

「あの、貴方の名前を…。」

『黒騎士と名乗っておこう。』

「黒騎士、さん……」

「後でお話を聞かせてもらえますか？」

『こちらも助かる、目が覚めたら炎の中だったからな。』

「そうなんですか？」

『ああここがどこかもわからないからな。』

「本部、要救助者一名、次元漂流者一名保護しました。」

『了解しました。』

フエイトが本部に連絡を入れていた。

「そろそろ出口です。」

『ようやくか』

建物から出ると下に救急車などのランプが確認できた。

『取りあえずあそこか。』

「はい、その子をそこに。」

救急車の近くに降り立つと近くに居た魔術師達が驚き杖を向ける。

「何者だ！」

『救助に協力したものだ。この子を……。』

腕の中のギンガを降ろすと魔術師達は少し気まずそうだった。

「そ、そうだったのか、すまない。」

『このなりだ、仕方の無いことだ。』

格好が格好だからな

「黒騎士さん、お話聞かせてもらえますか？」

『ああ、問題ない。小さくなったほうがいいのか？』

「えっ？！小さくなれるんですか？！」

まあ小さくというか、変身解除ですが

『まあとりあえず元に戻って大人しくしてるから救助に行つてやれ。』

話しながら跪く黒騎士

「わかりました、待ってて下さい……ね……」

「ん？どうした？」

尻すばみになっていくフェイトに疑問を持ちながら座るところを探
す。

「い、いえ。なんでもないです、居てくださいね！絶対ですよ！」

「お、おう、この辺りで待ってるよ。」

「では！」

凄い速度で現場に飛んでいくフェイト

「速いなあ〜」

黒騎士が竜騎士ならあれぐらい出せるだろうか？

「あ、あの黒騎士さん。」

「ああ、ギンガか、改めて自己紹介、防人 零 15才だ、よろ
しくな。」

「ギンガ・ナカジマです、よろしくお願いします。」

お互いに自己紹介をし、握手を交わす零とギンガ

「妹さんの様子でも見に行くか。」

「はい！」

握手した手を離さずに歩いていく零とギンガ、その姿は周りから見
れば恋人同士に見えなくも無かった。

side end

side フェイト

休みを利用してなのはと2人ではやての所に遊びに来ていた。
危険な遺失物が原因で起こった火災はあっという間に全体に回
っていた。

「管理局です！」

「ここです！」

「もう大丈夫ですから。」

『ディフェンサプラス』

「すぐに安全な場所へお連れします。「あ、あの！」はい。」

「魔導師の女の子がこのバリアを張ってくれて、それから妹を探
しに行くってあっちに…。」

女性は炎に包まれた通路のほうを指差していた。

「皆さんをお送りしたらすぐに探しに行きます。」

女性達を救急車のところまで送った後、女の子を捜しに戻った
が見つからない。

きやああああ

この先から！

私が着いたときには漆黒の翼を持つ黒い巨人が女の子を助けていた。

あれは一体…それより！

「管理局です、大丈夫ですか」

『大丈夫だ、問題ない。』

「あ、はい大丈夫です。」

『道案内頼めるか？』

「はい、「あ、あの！」なに？」

「エントランスホールの方で妹とはぐれてしまって、名前はスバル・ナカジマ 11才です。」

『エントランスホール…ショートヘアで青い髪の子か？』

「その子がスバルです！」

『安心しろ、天井をぶち抜いた白い魔術師に預けてきたから問題ないだろう。』

白い魔術師、きつとなのはだ

「よかつた」

『あの子の姉か、名前は？』

「ギンガ・ナカジマ 陸士候補生13才です。」

「候補生か、未来の同僚だ。」

「きよ、恐縮です。」

『どうかしたか？』

「あの、貴方の名前を…。」

『黒騎士と名乗っておこつ。』

「黒騎士、さん…」

黒騎士…騎士だから教会の人かな？

「後でお話を聞かせてもらえますか？」

黒騎士の体から尋常じゃない魔力を感じる…ロストロギアかな

『こちらも助かる、目が覚めたら炎の中だったからな。』

「そうなんですか？」

『ああここがどこかもわからないからな。』

次元漂流者かな、あとで裏を取らないと

「本部、要救助者一名、次元漂流者一名保護しました。」

『了解しました。』

フエイトが本部に連絡を入れていた。

「そろそろ出口です。」

『ようやくか』

建物から出ると下に救急車などのランプが確認できた。

『取りあえずあそこか。』

「はい、その子をそこに。」

救急車の近くに降り立つと近くに居た魔術師達が驚き杖を向ける。

「何者だ!」

『救助に協力したものだ。この子を…。』

腕の中のギンガを降ろすと魔術師達は少し気まずそうだった。

「そ、そうだったのか、すまない。」

『このなりだ、仕方の無いことだ。』

「黒騎士さん、お話聞かせてもらえますか?」

『ああ、問題ない。小さくなったほうがいいか?』

「えっ?!小さくなれるんですか?!」

なれるならなつてほしいかな、目線が…。

『まあとりあえず元に戻って大人しくしてるから救助に行つてやれ。』

話しながら跪く黒騎士

「わかりました、待つてて下さ…い…:…ね…」

え、ええ、なんだろ凄いときどきする、顔を直視できない!

「ん?どうした?」

零は尻すぼみになっていくフェイトに疑問を持ちながら座るところを探す。

「い、いえ。なんでもありません、居てくださいね!絶対ですよ!」

「お、おう、この辺りで待ってるよ。」

「では!」

うう、顔が熱いよ、まだ救助が残ってる切り替えないと!
あ、黒騎士って本名じゃないよね、戻ったら名前聞かなきゃ!

救助の事を考えつつ零の事を考えているフェイト

「フェイトちゃん。」

「きゃあ!」

突然の通信に驚くフェイト

「フェイトちゃん?」

「な、なんでもないよなのは、それでどうしたの?」

「こっちで女の子を助けてくれた白騎士っていう巨人にあったんだけどそっちはどう?」

「私の方にも黒騎士っていう人が来たよ。」

私のほうに黒騎士、なのはの方に白騎士、2人居るのかな

「白騎士からロストロギアに似た反応があっただけだよ。」

「黒騎士は救助が終わるまで待つてる様に行つてあるから後で一緒に話し聞こう?」

「そうなんだ、じゃ気をつけてね?」

「なのはも。」

通信を切り加速し現場に突入するフェイト。

急がなきゃ

side end

side 零

救助作業と火災の消化は無事終わった。

ギンガと共にスバルの様子を見ていたらスバルが

「白騎士となのはさんに助けてもらっただよ!」

「よかったね、スバル」

「うん、ところでお兄ちゃん誰？」

「俺は防人 零よろしくな。」

「よ、よろしくおねがいします。」

おっかなびつくりながらも握手をするスバル

そっいえば・・・

「迎えにこないけどいいのかなあ？」

「「？」」

「スバル、ギンガ無事か？」

「お父さん！」

ゲンヤが見舞いに來たのを見るやいなや飛びつくギンガとスバル

「おおっと、大丈夫みたいだな。」

「うん、白騎士と白い魔術師さんに助けてもらったの！」

「私はあの人に助けてもらいました。」

「そうなのか、よかったな。」

「うん！」

「娘が世話になったようだな、ありがとう。」

零の方を向いたゲンヤは深々と礼をした。

「やめてくださいよ、たまたまですよ。」

「それでもだ、何か礼がしたいんだがなんかないか？」

「右も左もわからない世界に來たので住む所が一番ほしいですね？ いや、図々しいですねこれは。」

「右も左もって前漂流者か？」

「そうゆう事になりますね、まあ適当にうるせーよし、うちに來い！」はい？」

零が何処に行くか考えながらの言葉はゲンヤの言葉に遮られた。

「ありがたいですけど、いいんですか？」

「ああ構わないぞ！な、2人とも。」

「うん！」「はい！」

ゲンヤの声に元気に答えるギンガとスバル

「そうですか、ではよろしくお願いします。」

こうして零はナカジマ家で過ごす事になった。

「さあさつさと帰るか！」

「」「」「はい！」「」「」

s i d e e n d

プロローグ（後書き）

感想・誤字・脱字がありましたらなんなりと。

ああ土日が恋しい。

？
(前書き)

遅れました！orz

言い訳を！

実は、他のゲームをやっけて書きませんでした。

あつやめて、石投げないで

それではどうz

？

side 零

空港火災から4年間 色々な事があった。

1年目

ナカジマ家から正式に家族にならないかと言われ、零・ナカジマへ名前を変え

スバルから「零にい」ギンガから「兄さん」ゲンヤからは「零」と呼ばれるようになり

俺からは「スバル、ギンガ、親父」と呼んだらスバルとギンガは笑顔で

ゲンヤは照れくさそうだった。

それから訓練校に行くことになり、第四訓練校に通うことになった。

2年目

デバイスはどうせなら作ってみたいと提案し自作することに。

半年かけて作成したデバイスはバイク型インテリジェントデバイス「アヴァター」

待機時は紋章が描かれているドッグタグ、

セットアップ時は基本を1st武装バイク型 2ndバスターフォーム

超々広範囲索敵、超々長距離射撃、マルチロックシステムなど砲撃に特化したデバイス。

固定武装「ファントムロード」

ギンガとスバルの先天魔法「ウイングロード」を真似て作成したため、足元にしか展開されない。

訓練校でマイスターの資格を取りスバルのローラーブーツの作成のアドバースを出したりしてる。

3年目

訓練校卒業後、陸士108部隊に所属、親父の頼みで出撃もこなしながら技術班として在籍。

基本メンテナンス室に引きこもっているが、たまにギンガと模擬戦もしている。

たまに来るはやてとは顔見知りである。

そして4年目…

スバルが魔導師試験を受けると聞き、心配だから見に行くことにした。ついでに受験。

受験者は3名 スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、零・ナカジマ

「やあっ!」

張り切ってるスバルは待っている間シューティングアーツの練習をしている。

「ティアナ、調子はどうだ?」

「今のところ問題ないです、零さんはどうですか?」

デバイスの様子を見ているティアナとアヴァターに跨りながらカートリッジを込める零

「まあ、いつもどおりだ、なあ？」

『周囲10km内の把握完了しています。』

「相変わらず範囲広いですね。」

「まあな」

「ふっはあっ！」

ああ、まだやってるのかスバルは

「スバルあんまり暴れていると試験中にそのオンボロローラーが
逝っちゃうわよ。」

「確かにそろそろ厳しいものがあるかも知ない、使い方荒いから。」

「うへえ、ティアに零にい嫌な事言わないで、ちゃんと油も注
してきたあ！」

「はいはい。」

「ぶう」

兄妹仲良く会話していると空中にウィンドが現れる。

「おはようございます。さて、魔導師試験の受験者さん3名揃っ
てますか？」

「はい！」「はい！」

「おう。」

それぞれウィンドの前に整列する。

「確認しますね？時空管理局陸士386部隊に所属のスバル・ナカジマ二等陸士と、」

「はい！」

「ティアナ・ランスター二等陸士。」

「はい！」

「それに陸士108部隊に所属の零・ナカジマ二等陸士。」

「はい。」

「所有している魔導師ランクは陸戦Cランク、
本日受験するのは陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で間違いな
いですね？」

「はい！」

「間違いありません。」

あつたら困るよ

「はい、本日の試験管を勤めますのは、私リーンフォースツヴァイ空曹長です、よろしくですよ。」

「「よろしく願いします。」」

「します。」

「まず二等陸士の2人はここからスタートして各所に設置されたポイントターゲットを破壊、

ああもちろん破壊しちやだめなダミーターゲットもありますからね。」

青いマークの入ったターゲットが表示される、これがダミーか

「妨害攻撃に気をつけて全てのターゲットを破壊、

制限時間内にゴールを目指してくださいです、何か質問は？」

「えっ、えっつと」

「ありません。」

「ありません。」

「はいはい、俺は？」

半ば放置されていた零は手を挙げ質問する。

「あつ、忘れてました、零二等陸士も内容は同じですが1人です
ので、

ルートが違っただけで後は同じですよ。」

「酷いなあ。」

まあいいか、ちゃっちゃんと終わらせよう

「では、スタートまであと少しゴール地点でお会いしましょう、ですよ」

ウィンドが消えると同時にカウントが始まる。

ポン　　ヴオオン

ポン　　ヴオオオン

「レディ……」

ピーー　ギユルギユルギユルギユル！！

「ゴー！」

ティアナとスバルは走り出したのを見届けてつと

ヴウウウン

「さて、ちゃっちゃんとやってゴールで待ってますか」

ヴウウウウウン　キッ

零はスタート地点から余り離れていない高いビルの上上移動していた。

「アヴァターターゲットマルチロツク、ダミーを抜かして何体狙

える？」

『バリア張っているのもが一機、それ意外なら問題ありません。』

我ながらとんでもないの作ったもんだ。

「よし、ターゲットマルチロック『数は？』 捕捉可能全て『了解、ロック完了、出力1%！』」

アヴァターの下に魔法陣が展開され、アヴァター後部のリア・サイドボックスから数多の漆黒の閃光放たれると同時にそれぞれ曲がり建物内に入っていく。

「ん〜どうだ？」

『全弾命中ターゲット破壊完了、ダミー健在です。』

よしよし、後一機だな

「最後の機体の近くまで行くか」

足元に騎士の紋章が展開される。

「ファントムロード」

ヴウウン

「スバルとティアナは大丈夫かね」

ラストのターゲットを過ぎゴール前で止まる零

「どうしたですか？零・ナカジマ二等陸士まだターゲット残ってますよ〜？」

「わかってますよりインフォースツヴァイ曹長、だからここに来たんですよ。」

「？」

「アヴァター2ndフォルム」

『了解バスターへ移行します。』

バイクが前後にずれ車体内に肘まで収納され固定される。
正面に六角柱のバレルが伸び、タイヤは両足に装着される。

「な、ななな、なんなんですかー！それはー！」

曹長驚きすぎだよーデバイスのデータ渡してなかったっけ？

「何ってデバイス？」

「デバイスって自作って書かれてましたが〜？」

「もち自作ですよ、自作インテリジェントデバイス・アヴァター」

『以後お見知りおきを』

「はあ〜、でなにするんですか？いつたい。」

驚きすぎて落着いたツヴァイ

「何って、砲撃。」

砲身に漆黒の魔力が集まる。

「スバルの練習に付き合ってたら覚えたやつでいってみるか」

『ターゲットロック完了、出力100%！いつでも撃てます。』

「一撃殲滅！ディバイインバスタアアーーーー！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオ

放たれる漆黒の砲撃は最後のターゲットを周りのビルごと消し去った。

上空に居たへりは衝撃波で激しく揺れていた。

「んゝやりすぎたか？」

「な、なななななっ」

ななな？ナルト？

「なな、何てことしてるんですかぁーーーー！！！」

「うわっ、そんな大声ださないでくれよ、これでゴールなんだし。」

腕に装着されたアヴァターの重量を感じさせない移動をしながらゴ

ールラインを通過する。

「よし、ゴールつと、スバル達早く来ないかな」

「ナカジマ三等陸士！なんて威力で砲撃撃ってるんですか――
――！！！！」

リンが物凄い剣幕で零に詰め寄る。

「なんて威力つて10%しか出してないんだけど？」

「ふえ？」

零の返答に目が点になるリン

「だから10%だって、カートリッジなしで10%！」

「ナ、ナカジマ三等陸士は魔力ランク幾つですか？」

「測った事無いな」

「は、測った事ないんですか？」

「うん、元々技術者だし。」

「じゃあなんで魔導師試験受けてるんですか？」

「んゝスバルが心配だったから？」

「だったから？って聞かれても知らないですよ、

この試験が終わったちゃんと測定してください！わかりましたか？！」

「わかりましたよ！受けるだけですよ？」

「はい、それでは他の2人を待ちましようか？」

「了解。」

スバルが無茶しなきゃいいんだけど…。

零はスバル達が居る方向を見ながらそんなことを考えていた。

曹長と雑談しながらスバル達を待っているとティアナを背負ったスバルが走ってくる。

ん？ティアナ怪我したかな？

背負われたティアナが最後のターゲットを撃破し、こっちに向かってくる。

「はい、ターゲットオールクリアです。」

ん？スバル加速したか？はあ・・・

「曹長、ゴール後ってスバル達に近づいてもいいですよね？」

「はい、いいですけどどうかしました？」

キイイイン

「あれ、明らかに停まれないでしょうから停めます。」

「あ、ちょいやばです」

「アヴァターズバルの速度測定、後方距離限界位置、減速率計算。

」

『了解、計算終了いつでもいけます。』

「OK」

零はゴールラインから少し離れて立ちスバルを待つ。

「零に避けてー!」

「避けるんだったら最初から出てきてないっ」と

ギュリリリリリリ!!

『停止まで25m』

シュッ

『停止完了』

「ありがとうございます、零さん」

「ありがとうございます、零に」

「どういたしまして、しかしだスバル」

「なに」

零はスバルの頭を鷲掴みにし、鼻がつくぐらいに近づけた

「れ、零にいい近いよ／＼」

「俺はいつも言っているよな？とばしすぎるなって。」

「あ」

「O S H I O K Iだね。」

ギリギリギリ

「いだだだだっ！！」

スバルを掴んだ手に力を入れO S H I O K Iを開始「2人と
も！」されなかった。

「危険行為で減点です！がんばるのはいいですが怪我をしては元
も子もないですよ！

そんなじゃ魔導師としては駄目駄目です！まったくもあ」

「まあまあちょっとびつくりしたけれども無事でよかった」

空から白い魔導師高町なのは教導官が降りてきた。

「ナカジマ三等陸士もありがとうね。」

「いえいえ」

「とりあえず試験は終了ね、お疲れ様。リンもお疲れ様、ちゃんと試験官できていたよ。」

「ありがとうございます、なのはさん。」

「まあ細かいことは後回しにして、ランスター二等陸士。」

「は、はい」

「怪我は足だね？治療するからブーツ脱いで。」

「あゝ治療ならあたしがやるですよ」

「あ、えと、すみません。」

スバルはなのはを見つめていた。

「スバル、憧れの高町教導官だぞ？」

「・・・なのは、さん。」

「うん。」

「あつ、高町教導官、一等空位！」

「なのはさんでいいよ、みんなそう呼ぶから、4年ぶりかな背伸

びたねスバル。」

「えと、その、あの・・・。」

「うん、また会えて嬉しいよ。」

「よかったなスバル。」

「ぐすつ。」

スバルは嬉さで泣いていた。

「私のこと覚えていてくれたんだ。」

「ぐすつ、あの覚えているっていうかなのはさんにずっと憧れて・・・。」

「嬉しいなあ、バスター見てちょっとびっくりしたよ。」

「あ、すみません勝手に！」

「すいませんでした。」

怒るかね？

「ふふふ、いいよそんなの。」

ありゃ、ならいいか

「で、でも」

「いいじゃないか、本人がいつて言っているんだから。」

お？へりからこつち見てる人がいる、敬礼敬礼つと。

ビルだ**いぶ**削**つち**や**っ**たけど怒られないよね？

？
（後書き）

誤字脱字、感想などなどありましたらどうぞ

次回は早めに出すようがんばります！

？（前書き）

お久しぶりです！

半年ぶりになるのでしょうか？

いつもより短い？ですが楽しみだった人もどうでもよかった人も
駄文ですがご覧ください。

それではどうぞ！

？

side 零

本局武装隊 エースオブエース 航空戦技教導隊
高町なのは一等空位……か。

面と向かって会うのは……初めてになるのかな？
前は変身してたから顔見せてないしなあ

「しかし、騎士の力は使わないに越したことないな、まだアヴァ
ターだけで対応ができる。」

『日々精進です。』

「了解。」

零達は建物に移動し新部隊の話を聞いていた。
というか火災の時は俺も居たから大体は知ってる。

「というわけや。」

おつと話聞いてなかった。

「部隊名は時空管理局遺失物管理局機動六課」

「登録は陸士部隊フォード人は陸戦魔導師が主体で、特定遺失
物の捜査と保守管理が主な任務や。」

「遺失物……ロストログアですね？」

「そう、でも広域捜査は一課から五課までがするからうちは対策専門。」

「そうですか・・・。」

（ティア、ティア）

（なによ？）

（ロストログアってなんだっけ？）

（うっさい話中よ！後にして。）

（説明しよう！）

（零にい！）

（ロストログアとは、過去に栄えた文明が滅び今の技術では解明できない技術でできたものである。

危険度に応じて最大SSSクラスまであるとかないとか。）

（へえ〜）

「で、スバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士、零・ナカジマ三等陸士。」

「はい！」

「は、はい！」

「はい？」

「あたしは三人を機動六課のフォアードとして迎えたいと考えてる。厳しい仕事になるやろうけど、

濃い経験になるやろうし、昇進機会も多くなる。どないやろ？」

「「は、はあ」「

どうしようかねえ？元々スバルが心配だから付いてきたけどこんな事になるとは・・・。

ん？高町教導官？

「えーと、取り込み中かな？」

「平気だよ。」

高町教導官が椅子に座る。

「とりあえず試験の結果ね、まずは零・ナカジマ三等陸士。」

「はい。」

「技術面、安全面共に合格、めでたく陸戦魔導師Bランクです。」

「おめでとう！零にいい！」

「の前に。」

「あれ？」

「零・ナカジマ三等陸士は魔力計測した事ありますか？」

「正確に測った事は無いですけど、確かCランクだったはずですよ？」

「え？本当ですか？貴方が撃った砲撃はAと計測されたんですが

？」

「それは、アヴァターの機能ですね。」

「そうなん？」

聞いてただけの八神二等陸佐が聞いてくる。

「はい、資料提供でも出しましたがけど自作インテリジェントデバイスアヴァター

最大の特徴がホイールの回転による周囲の魔力素の収集と魔力増幅です。」

「魔力収集に魔力増幅、自作言ってたよね？」

「はい、今の部隊で技術班に居るので暇を見つけては作製してました。」

「じゃあ陸士108部隊の時の主な活動は？」

「主な活動はデバイスの修理・整備・改良と緊急時の単独戦闘・フルバックでの戦闘参加（あとは殲滅戦かなw）です。」

「へえ〜そこまでできる人がランクCで居たなんて・・・。」

「ほんまや、それだけで引く手数多やないか。」

「ランクとか気にしたこと無かったんで、基本的には整備室に籠ってますね。（たまにギンガの訓練には付き合ってるけどね。）」

「そうなんだ、それじゃ零・ナカジマ三等陸士。」

「はい。」

「陸戦魔導師Bランクおめでとう。」

「ありがとうございます。」

「おめでとう！零にい！」

「おめでとうございます、零さん。」

「2人ともありがとな。」

「さて、今度は2人だね。」

「「ごくっ」」

「2人とも技術はほぼ問題なし、でも危険行為や報告不良は見過ごせるレベルを超えています。」

自分やパートナーの安全やルールを守れない魔導師が人を守るなんてできないよね？」

「うんうん。」

「・・・はい。」

「だから残念ながら2人とも不合格。」

不合格か！最後の加速が一番だろうなあ！

「だけど。」

「「「え？」「」」

「2人の魔力値や能力を考えると半年間Cランク扱いなのはかえって危ないかも、というのが私と試験官との共通見解。」

「ですう」

「ということでこれ、特別講習に参加する用紙と推薦状ね？」

「え、え？」

「本局の先輩方に揉まれて安全とルールを覚えてこよ？そしたらBランクなんて楽勝だからね。」

「ありがとうございます。」

「合格までは試験に集中したいやろ？私への返事は試験に合格してからで。」

「すみません！恐れ入ります！」

「俺はすぐに返事した方がいいですか？」

「零三等陸士はスバル達が返事するまでに決めてくれればええよ。」

「わかりました。」

話が終わりスバル達は中庭へ向かった。

「さて、陸佐の所に良くか。」

零は歩いてきた通路を戻っていく。

「八神二等陸佐よろしいですか？」

「ん？あ、零やないか？そうかしたんか？」

「実はですね、「いつも通りでええよ？」そうか？」

「そうや、もう試験終わったんやし。」

「それじゃ、久しぶりだね、はやて。」

「久しぶりやね、零君。やけど、あんな砲撃撃てるなんて知らなかったわ。」

「まあはやてが見てるときって屋内だからね、あれ撃ったら訓練施設どころか隊舎が吹っ飛ぶ。」

「それもそか。それでどうしたんや？」

「そうだった、はやて俺は六課に入隊するよ。」

入隊することをはやてに伝えるとはやてはびっくりしていた。

「本当にいいん？入隊したら今までのように技術室に籠ることで

きへんくなるで?」

「まあ籠れなくなるのは困るけど、スバルとティアナが心配でね・
」

「ふふふ、兄馬鹿やね。」

「うっさい。」

零は姿勢を正し敬礼をする。

「本日現時刻をもって零・ナカジマ三等陸士、機動六課に入隊します!」

「入隊を認めます。これからよろしくな。」

「ああ、よろしくな。じゃ一旦隊舎に戻って荷物纏めてるは移れるのは何時ぐらいだ?」

「んゝスバル達と一緒に来れば問題ないよゝ」

「了解。じゃあなゝ」

「またなあゝ」

はやてと別れ零は隊舎に向かっていった。

数カ月後零は機動六課へ来ていた。

「流石に新しい部隊だけあって綺麗だな。」

隊長の挨拶があるまで待機しながら周辺を見ていた。

お？こんなちっこい子達もフォアードかってピンクの髪の子
がこつちを見てる。

んゝあの子から竜の気配がするなあ・・・。

はやてが台にあがってきた。

「機動六課課長そしてこの本部隊舎の総部隊長八神はやてです。
平和と法の守護者、時空管理局の部隊として事件に立ち向い人
々を守って行くことが

私達の使命であり、なすべきことです。実績と実益に溢れた指
揮官陣、若く可能性に溢れたフォアード陣

それぞれ優れたメカニックやバックヤードスタッフ、全員が一
丸となつて事件に立ち向つていけると思っています。

まっ、長い話は嫌われるんで以上ここまで機動六課課長及び部
隊長八神はやてでした。」

この後は訓練か？

高町教導官に連れられて訓練施設に向かう。

「ティアナ達はスターズか。」

「はい、零さんはライトニングなんですね？」

「ああこいつらもライトニングだ、名前は」

「リエオ・モンディアル三等陸士です。」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。」

「ティアナ・ランスター二等陸士よ。」

「スバル・ナカジマよろしくね、エリオ、キャロ」

「はい！」

その後経験・所持スキルの確認を行っていく。
高町教導官が振り返る。

「そういえばお互いの自己紹介はもうすんだ？」

「済みました、部隊分けコールナンバー、経験と所持スキルも終わりました。」

「そう、じゃあ訓練に入りたいんだけどいいかな？」

「はい！」

一旦解散し訓練用の格好をして訓練施設に向かう。
そこで零以外預けていたデバイスを返される。

「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入ってるから

ちよつとだけ大切に使つてね？それからメカニツクのシャーリーから一言。」

「メカニツクデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。」

みんなはシャーリーって呼ぶのでよかつたらそう呼んでね？

みんなのデバイスを改良したり調整とかしたりするのでときどきに訓練を見せてもらったりします。

あつ、デバイスについての相談とかあつたら遠慮なく言つてね？」

「……はい」

「じゃ早速訓練に入ろうか？」

「はい。」

「ここですか？」

目の前には足場だけがただただ海に浮かんでるってキャロの竜が頭の周りをクルクル回ってる。

「あ、フリード戻つて。」

キャロの言うことを聞かず俺の頭に乗っかってくる。

フリードが自由に動いている間に海上に廃墟の町が現れてた。

「あ、あのすいません。」

「構わないよ、キャロこの子フリードって言つのかい？」

「はい、フリードリッヒでフリードです。」

「きゆるくう」

「ん？仲間の気配がするってか？」

「零さんフリードの言葉わかるんですか？！」

「まあ契約してるのに竜がいるからな、なんとなくわかる。」

「そうなんですかあ」

「まあ積もる話は後でだな訓練始まるぞ？」

「はい！」

各自デバイスを装着し待機する。

『みんな聞こえる？』

「「「「「はい！」「」「」「」」

「早速ターゲットを出していこうか、まずは軽く8体から。」

「動作レベルC攻撃制度Dってところでしょいか。」

『私達の仕事は創作指定ロストログアの保守管理、その目的のために私達が戦うことになる相手はこれ。』

少し離れたところに魔法陣が展開され楕円形のフォルムが見えてきた。

『自立行動型の魔導機械、これは近づくとも攻撃してくるタイプね？攻撃は結構鋭いよ？』

『では、第一回模擬戦訓練、ミッション目的逃走するターゲット8機 破壊又は捕獲 時間は15分以内。』

「……はい！」「……」

「んゝ了解。」

『それでは』

『ミッション』

『スタート！』』

スタートと共に散開するガジェット
それと同時にエリオとスバルが追いかけていく。

「いくよ、エリオ！」

「はい！」

「おお早いねゝ、アヴァターエリアサーチ、サイド装備、あとパイク出して。」

『サーチ完了、サイドユニット装備、パイクリアボックスから射

出します。』

アヴァター左側にサイドカーが装備され後部に装備されているリアボックスから

バイクが射出され零の前に刺さる。

「零さん、サーチデータ見せてください。」

「了解、追いかけるからティアナはサイドにキヤロは俺の前に乗ってくれ。」

「「はい。」」

アヴァターを加速させガジェットを追いかける。

「それにしても早いなあね。スバルとエリオばらばらだな。」

「前衛2人！分散しすぎ！ちよつとは後ろのこと考えて！」

『す、すいません。』『ごめん！』

「ちびっこ、威力強化。」

「はい、ケリユケイオン。」

キヤロの足元にピンクの魔法陣が展開される。

「シュート！」

ティアナがガジェットに狙いを定めて魔力弾を放つ

ガジェットに中る直前に魔力弾が消された

「バリア？」

「いえ、違います、フィールド系？」

「魔力が消された?!」

『そう、ガジェットドローンにはちょっと厄介な性質があるの。

Anti Magi-link Field AMF 普通の
射撃も通じないし、

「それに出力次第で移動系も無効化ですか」そうゆうこと。』

「てことでスバル移動は無しだぞ？」

「は、はい。」

「さて、ティアナ、キャロなんかあるか？」

「わたしはいくつかあります。」

「自分もいくつか試してみたい事があります。」

「よし、それぞれ行動してくれ、溢れたら俺が対処しとく。」

「「よろしく願いします!」「」

ティアナ達はそれぞれ移動開始する。

「さて、呼んでおきますか」

零の足元に四角い魔法陣が展開される。

「我と契約せし星よ、我が声、我が問に答えし者よ、我が命を聴き姿を見せよ。こい！ジャイアントビー！（以後GB）」

零の周りに約1mの蜂が5匹現れた。

ブブブブブッ

「さてさて、どうなるかな？」

四人がそれぞれ連携し7機まで撃破した。

「ありや、1機溢れたか、行け！GB！アサルトニードル！」

ブーーン！

ジャイアントビーから発射される針によりガジェットは串刺しになり撃破された。

『はい、今日の訓練終了』

なのはさんの合図で訓練が終了した。

ティアナ達はグロッキーになって寝てしまった。

零だけはピンピンしてたのなのはにGBの事を話しながら

GBにティアナ達を宿舎に運んでいた。

後で今後GBで運ぶのはやめてくれと言われたのはまた別のお話。

？
(後書き)

白騎士のゲームが楽しくてこっちが愚かに・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4264o/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 古の騎士

2011年11月12日06時26分発行